大陸諸文化圏男子被験者の箱庭作品に共通して現れる空間的特徴と
彼らの世界像について

空間イメージの文化的差異に関する心理・社会的分析 その4

A STUDY ON THE COMMON SPATIAL CHARACTERISTICS IN
THE SANDPLAY-CONSTRUCTIONS BY MALES OF THE COUNTRIES UNDER
THE INFLUENCE OF CONTINENTAL CULTURES AND THEIR *IMAGO MUNDI*

Psycho-social analysis on the cultural difference of spatial images Part 4

坂戸 省三*

Shozo SAKATO

In the sandplay-constructions of the male Westerners, centralized patterns appear frequently. This image represents their modality of being-in-the-world, and the same pattern has been used in the majority of the main historical architecture. Meanwhile this pattern is dominant in the architectural history of the continental cultures of the Orient. Therefore it is expected that this pattern appears frequently in the sandplay-constructions of the Oriental males of the continental countries. In this paper, we verify this expectation and make a comparative study on the spatial characteristics of the continental and the Japanese cultures from a psycho-social point of view.

Keywords : *experiment of sandplay-construction, continental cultures, the West, the Orient, centralized pattern, manly characteristic*

箱庭制作実験、大陸の諸文明、西洋、東洋、有心的様式、男性的性格

1. はじめに

本論文は、一連の箱庭制作実験による研究の一環をなすもので、その主要な目的は、大陸諸文化圏の男子被験者の箱庭作品から、彼らが、東洋、西洋を通じて、空間イメージの様式を共有している事実を論述することにある。またそれらと日本人男子の箱庭作品を比較することで、日本の空間文化の独自性を再確認することをもあわせて目的とする。

ヨーロッパ、イスラム、インド、中国という大陸の諸文化圏では、歴史的に見て主要な建築は、対称的、幾何学的、凸的、垂直的、彫塑的で量塊的な特徴をもち、一つの中心や軸によって全体が統合される構成をとっている。一方、日本の建築においては、非対称性や不規則性、いくつかの空間が水平的、連続的に広がってゆくといった多様な構成等々の特徴が言われている。そして前報までに論じたように、箱庭制作実験における留学生男子および日本人男子の箱庭作品にも基本的には同様な空間的特徴が見て取れるのである。そうなるのは、箱庭作品には作者がどのように世界を捉えているか、またその世界の内にどのように存在しているかが自ずと現れてくるという事実があり（次節で詳述）、同様に建築作品にもこのような人間の根本的な世界像や存在様態が現れていることによる。これまでに、そうした視点から、大陸諸

文化圏および日本文化において特徴的な空間様式の心理・社会的意味を分析してきたわけである。

ところで前報までに対象とした留学生被験者は、「その1」（以下、既発表論文 vi、vii、viii を、それぞれ「その1」、「その2」、前報または「その3」と記す）で作品シリーズを詳しく分析したトルコ人被験者1名を除いては西洋文化圏の被験者に偏っていた。それらだけで大陸諸文化に共通する空間的特徴を論ずるには無理があった。もっとも、建築における空間イメージも箱庭作品におけるそれも人間の世界内存在の様態¹⁾を反映したものであってみれば、建築において男性的一元性の空間イメージ（一つの中心や軸が全体を統合あるいは支配している空間様式をこう呼んでいる、後詳述）が優勢な東洋の諸文化圏では箱庭作品においても同様なイメージが多数現れることが容易に予測できたことは事実である。幸いにも前報執筆後、22 か国 49 名の留学生に対して箱庭制作実験をおこなう機会をえた²⁾。そこで本報では、大陸諸文化圏の男子被験者の箱庭作品には、西洋、東洋ともに同じように男性的一元性のイメージおよびそれに関連した空間イメージが実際に多数現れてくるという予測を確認することになる³⁾。

また「その2」、「その3」での考察は、日本人、留学生ともに建築学専攻（意匠系が大多数）被験者の作品に関するものであつ

* 明石工業高等専門学校建築学科 教授・博士(工学)

Prof., Dept. of Architecture, Akashi National College of Technology, Dr. Eng.

たが、建築学専攻者は留学生、日本人とも、抽象的傾向の高い作品を作るという著しい特徴がある。その抽象性ゆえに、これまでの考察は、男性的一元性のイメージおよび多元性の空間イメージ⁴⁾に焦点を当てた空間構成的視点からの考察が主となった。一方、今回の実験は49名のうち3名(男1名、女2名)を除いて建築以外の一般の院生等である。そこには具象的なイメージが豊富にあるので、本報ではより具体的な心理・社会的分析をおこなうことができ、これも一般の被験者の作品である岡田天理資料(幼稚園から大学までの日本人男女約300名の箱庭作品⁵⁾)と比較し、より全般的、具体的な分析をおこなう。また、あわせて男性的一元性の空間イメージが大陸諸文化における世界像(imago mundi)と表裏一体のものであることを論じる。

2 研究方法としての箱庭制作実験について

人間は常に何らかの世界像を現実世界に投げかけ、その結果をフィードバックさせ、さらなる世界像を意識的、無意識的に構築しつつ存在している。そうした世界像構築作用の早い現れが、幼い子供たちの積み木遊びやままごなどの「想像的情景を創り出す、玩具世界での遊び」なのである。高等動物になるほど若い個体の遊びは多様で頻度の高いものとなるが、遊びは当の動物の本質的な行動様式の発現および学習行動と関連している。幼い子供の玩具世界での遊びは人間の想像力、創造的活動の個体発生的起源であり、人間が自分のいる世界を把握し、経験を整理してゆく方式の原型をなす。この種の遊びを「世界像遊び」と名づけ、論文iii、ivで既に詳しく論じた。箱庭療法はこうした人間の子供に自然に現れてくる遊びそのものを基礎としている。また箱庭制作実験は、実践の中で改良されてきた箱庭療法の道具立てをそのまま実験として使用したものである。

箱庭療法においても、箱庭制作実験においても、制作者にはテーマを与えたりせず、何でも好きなものを作ってもらふ。そこで棚に置かれている多種多様な玩具のどれかが、いわば作者に呼びかけ、心の中にあるものを引き出してくる。論文iiで見たように、幼稚園から大学にいたる男女約300名の箱庭作品には、作者

の住む世界・空間の様態が自ずと現れている。実際の箱庭療法に限らず、箱庭制作実験においても、作品シリーズには、本人の意識を越えて、作者の人生もようを反映した物語がしばしば現れてくる。遊びをとおして、作者は特に意識しておらずとも、無意識の内容を掘り起こし、ライフサイクルの段階に固有な仕方ですれらを再構成しているのである。

このように箱庭制作は人間の世界把握の普遍的方式を反映しているということにおいて、箱庭作品には、作者がどのような世界のなかで、どのように生きているか、すなわち世界内存在の様態が現れているといえる。人間はそのつど、ヒトという種の一員として、ある特定の文化的伝統のなかで、個々の個人的歴史をもった者として生きているわけであるから、箱庭作品にも、ヒトの男女としての人類共通の世界の捉え方、文化に共通する捉え方、そして個々人各々の捉え方が現れている。本論文シリーズでは前二者について主に論じてきているが、そこで論じた基本的な空間イメージ等の内容は、単に箱庭作品に限定されたものではなく、人間の世界内存在の基本的な様態を表すものとして、建築空間、生活空間、その他の空間的事象を論じる上での基礎的な知見を提供するものである。

3 日本人男女の箱庭作品に現れる基本的な空間的諸特徴

本報では日本人と大陸文化圏の留学生の箱庭作品の比較考察が重要な課題であるので、ここで多数の日本人による箱庭作品を集めた岡田天理資料の検討結果について簡単に示しておく。箱庭作品は作者が自由に作るという条件にかかわらず、多くの人に共通する空間構成やテーマが現れてくる。その概要を発達的に示したものがグラフ1、2で、論文iiに掲載したものである。男女それぞれに年齢を超えて共通の空間的特徴がいくつかあり、それらはどの年齢群でも頻繁に現れてくる。男子では、移動・侵入的傾向⁶⁾が多く現れる。移動・侵入性は幼稚園児の乗り物の多用、小学三年生の戦いのイメージにおける戦闘車両、小学六年生の野生動物原野の動物たち、中学二年生の町のイメージの通過交通、高校生

グラフ1 日本人男子の空間性の発達過程

(岡田天理資料男子作品および女子作品の分類、網掛け部分は男性的一元性の作品および女性的一元性の作品の発達の推移を示す)

グラフ1、2ともに坂戸省三：男女それぞれにおける空間性の発達過程(既発表論文ii)、p.98、1987による

グラフ2 日本人女子の空間性の発達過程

ージは**外部的**（箱の枠を超えて空間的に広がっているイメージのもの）な性格をもつものが多い。また日本人においては、母性的環境から外へ攻撃的に向かってゆく時期である小学三年群で戦いのイメージとしての**男性的一元性の空間イメージ**がまとまって現れる以外は、各年齢群とも**多元的**（多焦点的構成や空間的にいくつかの領域に分節化されているもの）な空間構成が全作品の過半を占める。発達の推移を示すために、グラフ1では男性的一元性の空間様式を網掛けで示してあるが、それは小学三年以降年齢とともに急激に減ってゆき、高校、大学群ではわずかしこ現れない。なお思春期以降、男子でも内部的（箱の枠内でイメージが空間的に完結している傾向のもの）なイメージが増え、次に述べる女性的一元性の空間に分類できる作品も一定量現れてくる。

女子では、男子が移動・侵入的であるのに対して、**住人的**（人々が楽しげに暮らしている様子、あるいは住むための空間が主題的に表現されているなど）、**内部的で、内包的**（全体あるいは主要な部分が囲われた表現をとるもの）という特徴が顕著に見られる。そして住人的、内部的で、全体として一つの大きな空間が表現されているものを**女性的一元性の空間イメージ**と名づけたが、それがどの年齢でも多数現れることをグラフ2の網掛けは示す（男子作品におけるそれも網掛けで示す）。また女子では思春期以降、特に大学生で二つの領域に分かれた二つの**世界のイメージ**が増える。

以上の移動・侵入的、外部的、多元の特徴および男性的一元性のイメージは空間の男性的要素、住人的、内部的、内包的の特徴および女性的一元性のイメージは空間の女性的要素といえる。また前報までに再三述べたように、空間構成における大陸の特徴の基底にある男性的一元性のイメージ、および日本の特徴の基底にある多元性の空間イメージはともに男性的な空間イメージである。

4 留学生対象の箱庭制作実験と作品の分類について

2000年11月から2001年2月にかけて、留学生男子13カ国、25名、実験回数計54回、留学生女子14カ国、24名、実験回数計59回の実験をおこなった⁷⁾。実験は1回1時間の制限時間で、1人2回を一応の基準としたが、興味をもちさらに箱庭制作を希望する者には4回をめに追加の実験をおこなった。また相互の影響を排除するため、各人の実験終了時までお互いに作品について話し合ったり、写真を見せ合わないようにした。

留学生男子と日本人男子の作品を比較するため、分類はグラフ1と対応する項目をもちいるが、グラフ1の項目分けは男性的一元性のイメージが小学三年生段階を除いて少ない日本人男子の箱庭作品資料に基づいて作ったものである。それで今回留学生の分類に当たっては、新たに男性的一元性のイメージの項目および何らかの中心的事物を有する作品という項目をたて、次の①～⑦の分類項目で考察を進める。

図1 求心的形式

図2 遠心的形式

図3 マンダラ形式

図4 正面性の強調

図5 戦いのイメージと中心軸

① **男性的一元性のイメージの諸形式をもつ作品**。このイメージは本論文シリーズの分析において中心的な意味をもつので、ここで再度詳しく説明しておく。箱庭療法では、その過程の重要な時点でしばしば療法家がマンダラと呼ぶ様式が現れるが、私が男性的一元性の空間イメージと呼ぶものは、以下述べるような、マンダラと共通する空間構成および心理的意味をもつものを総称したものである。

写真1は、中心と4隅という構成（図3）をもつユング派のいうマンダラの典型例と見なせる作品である。中央の小山の中心に大仏が据えられ、それを円環状に水路が取り巻き、4隅には城、住居地、動物たちのいる森、高山が置かれている。作者によれば自分が住みたいユートピアのイメージとのことである。この作品では中心の大仏をとる垂直軸が想定でき、それは世界の中心軸としての世界軸（axis mundi）と解釈できる。この作品は、中心性、垂直性、世界軸、凸的形状、円環、対称性、幾何学性等々の特徴を総計的にもっているが、私が男性的一元性のイメージと呼んでいるものは、もっと広く、一つの中心や軸によって全体が統合あるいは支配されているイメージ全般である。

男性的一元性のイメージは、「その1」で詳述したように、求心的形式（図1）と遠心的形式（図2）に大きく一般化することができる。どちらの形式も臨床心理学的には男性原理（攻撃性、競争性、支配性等々の性格を有する）と関連しており、攻撃的、対決的な力動を秘めたものである。求心的形式は、心理的には、何ものかへ向かおうとする強い無意識的な力の勃興、新たな人間的局面にさしかかりつつあること、そしてそれらに伴う不安、緊張等を表している。求心的形式の場合、中心は未分化なものであったり、まだ実体化されていなかったりする。一方、遠心的形式は多くの場合、中心に明快なかたちあるものが象徴的に据えられ、それを中心に全体が秩序化される。この形式は、心理的には、自らが主体的に支配するものであることの晴れやかな宣言である。求心的形式にはしばしば直接的に攻撃性が表現されるが（戦いのイメージなど）、遠心的形式は自信、誇示あるいは主体性の宣言といった昇華されたかたちでの攻撃性の表現といえる。なお、「その2」では遠心的形式のイメージと、西洋人男子の自我構造、あるいは世界内存在の基本的様態との関連を分析した⁸⁾。しばしば現れる遠心的形式としては、図4のような中央の軸線を持ち、その奥に中心的事物が置かれるものなどがある。

即物的に攻撃性が現れている男性的一元性のイメージとして、**戦いのイメージ**の作品がある。それらは、図1の形式をとることもあるが、図5の形式で、中央の軸で左右の軍団が激突するイメージが多い。これは一般に求心的形式の男性的一元性に分類される。なおグラフ1には戦いの項目があるので、後述のグラフ3、4でもそれにあわせて横線部分として表示する。

② **何らかの中心的事物が存在する作品。**写真 11 は実際のネパールの国土を表現した作品で、北に山岳地帯、南に平野部、中間部にカトマンズなどの都市のある地帯が作られている。実際の国土を表しているため、外部的で多元的な構成となっているが、注目すべきは町のある中間部の中心に大きな塔が建てられていることである。つまり男性的一元性の空間のもっとも基本的な特徴である中心性が明瞭に出現しているのである（この作品の場合、中心物の垂直性も顕著である）。この作品のように多元的な構成であって男性的一元性の作品とまでは言えないが、何らかの明瞭な中心性が認められるものが、留学生の作品には東西を問わずかなりの数出現している。

この項目は男性的一元性のイメージと次の項目である外部的、多元的な構成の中間的性格をもつものが多いので、その分に関してはグラフ 3、4 の項目間の境界を斜めにして示す。

なお女性的一元性の空間で中央に住宅などが置かれる作品があるが、そうしたものはこの項目に含めない。

③ **外部的、多元的構成の作品。**写真 18 のように、線路奥の住宅地、駅前空間、右下の工事現場、左の林や山の空間といった具合に、いくつもの比較的独立的な領域によって構成され（多元的）、かつそうした領域が箱の枠を越えて連続的に存在していることが想定されているもの（外部的）を指す。通過交通の要素が置かれているものが多い（移動・侵入性）。グラフ 1 の外部的町、村に当たる。

④ **内部的、多元的構成の作品。**写真 22 の村の風景のように、箱の枠内でイメージが空間的に完結（数軒の小さな村といった箱の内部で完結している主題であることで内部的と見なす）、かつ多元的な構成のものを指す。内部的、外部的の境界は厳密ではないが（この作品の場合は箱の枠に沿った木々により囲まれた感を呈していることで内部性は強調されている）、おおよその傾向は指摘しうる。グラフ 1 の内部的町、村、家のうち女性的一元性の網掛けがかかっている部分に当たる。

⑤ **女性的一元性のイメージに対応する作品。**女性的一元性のイメージとは、先に述べたように、住人的、内部的、内包的（凹的）、そして全体として一つの空間であるもので、世界中の女性に高い頻度で現れてくる（写真 29）。日本人男子においては写真 30 のような女性的一元性の空間に分類できるものが思春期以降 2 割程度現れる（ただし登場人物が少ないなど、女子の作品に比べて寂しい感じのものが多い）。しかし留学生男子の作品には典型的な女性的一元性の空間は一つもない。そこで写真 24、25 のような住居空間で、内部的、全体として一つの空間が主題的であるもの（かつ男性的一元性の特徴が強くないもの）をこれに分類した。

⑥ **二つの世界のイメージの作品。**写真 26 のように、川などで二つの領域に分かれたものを指す。このイメージは箱庭療法において登校拒否症の回復過程などでしばしば現れることが知られている。また若い女性に高い頻度で現れる。未知の世界へのいくぶん受動的な関わり（若い女性では異性へのあこがれが見て取れるものが多い）と関連する。グラフ 1 の二元的に当たる。

写真 26 は作者の故郷ブダペストの風景で、博士課程の修了を控えて、国に帰るか、あるいは日本で研究の職を探すかと迷っていた時の作品である。作者の故郷への「郷愁の思い」が二つの世界

のイメージとなって現れたと言える。

⑦ **野生動物原野の作品。**子供の精神世界にとって動物のイメージは重要な意味をもつ。そのことはグラフ 1 の小学六年生段階で野生動物原野のイメージが大きな割合を占めていることに端的に示されている。大人でもそれは無意識的力動の世界との接触と関連するイメージとして現れてくる。このように臨床心理的に重要なイメージなので独立した分類項目として取り上げてある⁹⁾。今回の実験で野生動物原野と呼べるものは写真 27 ともう 1 例のみである。このイメージは外部的、多元的構成をとるものが多いが、この両作品には動物たちが求心的に中央に向かう傾向も見取れた。グラフ 1 でこの項目は左から 2 番目であるので、グラフ 3、4 でもそれにあわせる。

5 初回作品の分類

以下、作者の人格が相当広く統合的に示されることが多いといわれる¹⁰⁾初回作品を全て見てゆく¹¹⁾。本報においては、「その 1」、「その 2」で西洋文化圏男子留学生の箱庭作品を中心に考察した空間的特徴が、西洋に限らず大陸諸文化一般に共通することの確認が重要な課題なので、(a) 東洋系、(b) 西洋系というかたちに分けて作品を示す。説明をつけることで分類の意図等がより明確になるものには簡単な説明をつける。なお表示の仕方として、留学生男子被験者 1 作品①写真 1 は、留男 1 作①(1)と略記する。

① 男性的一元性のイメージの作品

(a) 東洋系。留男 1 作①(1)、実験回数 2 回（以下回数のみを記す）韓国、30 歳。先述。留男 2 作①(2)、1 回、中国（モンゴル系）、36 歳。この 2 作品のうち、前者は図 3 の形式、後者はそのバリエーションの形式と見ることができる。

留男 3 作①(3)、2 回、中国、32 歳。留男 4 作①(4)、2 回、中国、29 歳。前者では砂を盛り上げた上に家が置かれていることにより、後者ではその量塊的表現により、図 2 の形式と見なせる。両作品とも後述のように女性的一元性のイメージと関連する。

留男 5 作①(5)、2 回、中国、24 歳。作者は城に向かう軸方向で写真を撮るように指示。その方向から見ると、左の火山と右の岩山が対称的位置にあり、図 4 の形式と見なせる。以上の東洋系男性的一元性の 5 作品はすべて遠心的形式である。

(b) 西洋系。留男 6 作①(6)、1 回、メキシコ、32 歳。神社の表側のみでなく、裏側にも祭壇状のものが軸線上に置かれている。

留男 7 作①(7)、2 回、フランス、27 歳¹²⁾。図 3 の形式に近い。

留男 8 作①(8)、2 回、ベネズエラ、27 歳。男性的一元性とするか、単に中心のあるものとするかの境界にある作品だが、中心が図 3 の形式をもつこと、および中心から中央奥の大仏に至る軸が全体構成において重要な位置をしめることから、男性的一元性の作品に含めた。西洋系のうち以上の 3 作品は遠心的形式である。

留男 9 作①(9)、2 回、フランス、25 歳。4 隅に、左下鳥居と大仏および黄色蛇、右下金色の石と赤蛇のいる洞窟、右上火山、左上森の中の石組みといった神話的事物が置かれ、中央には樹木による二重の円環の中心に石が組まれる。右下の洞窟の上には中心部をのぞき込む子供が置かれる。図 3 の形式の一種であり、子供、大仏、蛇は中心を向き、四隅より中心に向かう方向性をもつ、求心的形式である。

写真1 留男 1 作① 韓国

写真2 留男 2 作① 中国

写真3 留男 3 作① 中国

写真4 留男 4 作① 中国

写真5 留男 5 作① 中国

写真6 留男 6 作① メキシコ

写真7 留男 7 作① フランス

写真8 留男 8 作① ベネズエラ

写真9 留男 9 作① フランス

写真10 留男 10 作① フランス

写真11 留男 11 作① ネパール

写真12 留男 12 作① 韓国

写真13 留男 13 作① ドイツ

写真14 留男 14 作① 韓国

写真15 留男 15 作① スリランカ

写真16 留男 16 作① インドネシア

写真17 留男 17 作① 中国

写真18 留男 18 作① メキシコ

写真19 留男 19 作① フランス

写真20 留男 10 作① フランス

写真21 留男 20 作① ドイツ

写真22 留男 21 作① スウェーデン

写真23 留男 22 作① マレーシア

写真24 留男 23 作① カナダ

写真25 留男 24 作① フランス

写真26 留男 25 作① ハンガリー

写真27 留男 14 作④ 韓国

留男10作②(10)、3回、フランス、23歳。実験初回の二つ目の作品。図5の形式の戦いのイメージ。

② 何らかの中心的事物の存在する作品

(a) 東洋系。留男11作①(11)、2回、ネパール、28歳。先述。

留男12作①(12)、4回、韓国、34歳。中央やや上、砂を盛り上げたところに教会¹³⁾があり、その前に大きな赤い花が並べられる。

(b) 西洋系。留男13作①(13)、2回、ドイツ、25歳。作者本人は図2の形式に近いとの意見であったが、男性的一元性とするほど明確ではないので、ここに分類する。また内部的性格といえる。

③ 外部的、多元的な構成の作品

(a) 東洋系。留男14作①(14)、4回、韓国、26歳。留男15作①(15)、1回、スリランカ、29歳。留男16作①(16)、2回、インドネシア、22歳。留男17作①(17)、4回、中国(朝鮮系)、23歳。

(b) 西洋系。留男18作①(18)、2回、メキシコ、29歳。先述。留男19作①(19)、2回、フランス、20歳。留男10作①(20)、3回、フランス、23歳。留男20作①(21)、2回、ドイツ、29歳。最後の作品は抽象的であるが、空間構成上の観点からここに分類する。

④ 内部的、多元的な構成の作品

(b) 西洋系。留男21作①(22)、2回、スウェーデン、25歳。先述。

⑤ 女性的一元性のイメージに対応する作品

(a) 東洋系。留男22作①(23)、3回、マレーシア、27歳。村の作品で、左ののどかな広場を女性的一元性の空間と見てここに分類したが、前項の内部的、多元的な構成と見ることもできる。

(b) 西洋系。留男23作①(24)、1回、カナダ、23歳。先述。留男24作①(25)、1回、フランス、22歳。積み木住宅、先述。

⑥ 二つの世界のイメージの作品

(b) 西洋系。留男25作①(26)、3回、ハンガリー、28歳。先述。

6 結語 日本人男子の作品との比較考察

東西留学生の作品群を以上の分類で示したものがグラフ3、4である。グラフ1、2は発達の推移を見るために100%表記としたが、グラフ3、4は実験全制作回での各分類項目の出現数のあ

らましがわかるように作品数で表示する。なお日本人の実験は1回きりのものなので、留学生の初回作品を主な比較対象とする(そのためグラフ3、4では1回目のみ%表示をつける)。それで比較のための%表示は留学生の場合初回作品のものとし、参考のため()内に全制作回における割合を添える。

(1) 世界像(imago mundi)としての男性的一元性のイメージ

グラフを見ると、留学生作品群が東西とも同じような傾向を示していることが確認できる。それに対して日本人作品群とは著しい違いを示す。まず男性的一元性の作品に関しては、東洋系留学生42%(41%)、西洋系留学生36%(35%)であるのに対して、日本人男子には男性的一元性は求心的作品が1例と、遠心的形式の要素をいくぶんもつ作品としての写真28¹⁴⁾と、グラフ1では女性的一元性の作品に分類した写真31があるのみで、それらを入れても計3例9%である。日本人男子の場合、前報で述べたように、一時的な緊張過程と関係する求心的形式は時々現れるものの(グラフ1の網掛けで表した男性的一元性のすべてが求心的形式といえるもので、そのほとんどが戦いのイメージである)、遠心的形式となると著しく少ない。留学生での男性的一元性のうちの遠心的形式は、東洋系では100%(83%)、西洋系では60%(78%)を占める。分類②の明確な中心をもつ作品は男性的一元性のイメージと連続したものであるが、日本人男子でははっきりとそれといえるものはない。そこまで含めると差はさらに大きくなる。すなわち東洋系58%(59%)、西洋系43%(46%)である。

外部的、多元的な構成も留学生男子の方がやや多い。そして目に付く違いは、この後に述べる留学生男子には典型的な女性的一元性の空間がないこととも関連するが、日本人においては内部的空間が思春期以降4割前後存在しているのに対して、留学生では、東洋系8%(14%)、西洋系では全作品中写真13、22、24、25の4作29%(15%)と少ないことである¹⁵⁾。この事実は「その2」での建築学専攻者作品に関する次のような考察結果と関連する。すなわち男性的一元性の空間は、中心の垂直軸をy軸としたx y z軸によるどこまでも広がる均質な空間であること、そして建築系留学生男子の作品は男性的一元性のイメージであるか、こうした均質空間の中に実体的な諸要素が置かれるかたちでの多元的作品であったことである。つまり今回の実験の留学生男子における

写真28 日本男子学生 1

写真29 メキシコ人女性

写真30 日本人男子学生 2

写真31 日本人男子学生 3

写真32 留男 17 作③ 中国

写真33 留男 22 作② マレーシア

写真34 留男 24 作② フランス

写真35 留男 11 作② ネパール

外部的空間の多さ（内部的空間の少なさ）は、建築系留学生においては均質空間というどこまでも広がる外部的空間として現れていたことがらと同根元的であると考えられる。一方で日本人建築学専攻者の作品では、外部的空間に分類できるものでさえ、木々に覆われ、全体にいくぶん内部的印象を与える多元性の空間がしばしば見受けられたのである¹⁶⁾。

さてこう見てくると、大陸文化の一つに属する西洋人が空間論において主張することがらの意味が改めてわかるようになる。ボルノウは彼の空間論において、中心や世界軸といったことがらに多くのページを割いている¹⁷⁾。またノルベルグ・シュルツは「固定点、＜中心＞を発見あるいは投射することは、世界創造にひとしい¹⁸⁾」というエリアーデの言葉を引用し、人間はつねに世界全体を中心づけられたものとして考えていること、そしてその中心は一般に天と地をつなぐ垂直な世界軸として体験されるものであることを主張する¹⁹⁾。ノルベルグ・シュルツはローマ人の世界像(imago mundi)を表すものとして図6を示し、人間の「実存的空間の構造」(つまりそれは「自己像」である)として図7を掲げる²⁰⁾。両者ともに全くの遠心的男性的一元性のイメージである。こうしたことは箱庭作品にも見られる。例えば留男1作①(1)は世界像(imago mundi)を示し、留男9作②(34)は自己像を示すといえる(作品内容から中央の城は作者本人を象徴すると考えられる)。「その1」で論じたように世界像(imago mundi)と自己像とは本来相互依存的なのである。つまりノルベルグ・シュルツによる言説や図が意味しているのは、「その2」で明らかにした、遠心的男性的一元性のイメージが彼らの世界内存在の基本的様態を表したものであるということに他ならない。それらは男性的一元性のイメージを自我の核としてもつ文化に属する男性の経験的な実感そのもの(心的事実)の反映であり、彼ら自身のいわば自画像、自己告白といえるものである。

こうしたことがいえるのは西洋文化に限らない。男性的一元性のイメージの典型であるインドのマンダラはもともと彼らの宇宙を表すもの(imago mundi)であった。地水火風の4元素が下にある、その上にメール山があり、一番上に宮殿があるという立体的な像を上から見て二次元的に図像化したものという²¹⁾。また天壇に表現されている中国人の世界像(imago mundi)も同じ構造をもつ。そもそも彼らの世界像(imago mundi)である中華思想自体が男性的一元性のイメージの概念化そのものといえよう。

(2) 女性的一元性のイメージの要素が少ないことについて

グラフ1の女性的一元性の空間は、個人的な内部的世界のイメージにあたるが、留学生男子においても個人的内部的世界を表す作品は存在するので、それを女性的一元性に対応する空間として分類したわけである。留学生男子の作品では、それが東洋系8%(10%)、西洋系14%(8%)と少ない(日本人男子では思春期以降2割前後)。そしてそれ以上に重要なことは、典型的な女性的一元性の様式をとるものはないことである。留学生作品で「女性的一元性のイメージに対応する作品」とした作品を見てみると次のようになる。留男17作③(32)は、中国東北地方の平原にある農家で、どこまでも広がる畑の中に自律的に存在しているイメージである。また留男22作②(33)は作者がself-islandと名づけた凸的に盛り上げられた島であり、ともに図2の遠心的男性的一

元性の要素をもつ。また留男23作①(24)、留男24作①(25)は内包性や人々が楽しく暮らしている雰囲気(女性の作品に多く現れる)は全くない。

留男3作①(3)や留男4作①(4)は男性的一元性に分類したが、これらは日本人の作品であれば女性的一元性の傾向をもった作品として作られたかもしれない内容である。留男3作①(3)は、お姫様の家へ王子様がやってくる場面で、留男4作①(4)は家に割烹着姿の婆さんがいる。どちらも家と女性が同一視されている。そしてともに男性的一元性のイメージで表されているという事実は、作者の女性との心理的關係が、外部的、均質的な空間での自律的な個対個という対峙のかたち(我と汝)でイメージされていることを示す。それらと比較すると、日本人男子の写真30からは、まさに母性的空間のなかに包まれて存在するという対照的な存在様態が見て取れるのである。

以上の考察からわかることは、東洋系であろうが、西洋系であろうが大陸文化圏に属する留学生男子の作品は、日本人男子の作品と比べると、全体に男性的性格が強まった方に大きくずれているという事実である。つまり男性的一元性、外部性といった要素が顕著に見られ、住人性、内部性、内包性、女性的一元性といった女性的要素がわずしか見られないのである²²⁾。

図6 ローマ人の4分割

図7 実存的空間の構造
Norberg-Schulz, C.: The Concept of dwelling, p.23, 1985

グラフ3 箱庭制作実験における東洋系留学生男子の作品分類

グラフ4 西洋系留学生男子の作品分類

7 今後の課題と展望

今回の実験でインド文化圏の被験者はネパール、スリランカの計2名、作品数3に過ぎず、イスラム文化圏被験者は0である²³⁾。しかし、インド文化圏の二人の内の一、ネパール人被験者留男11の作品は1作目の写真11に引き続き、2作目は写真35に示す典型的な男性的一元性のイメージであり、きわめて顕著に大陸的な空間の特徴を示している。またイスラム系に関しては、「その1」でトルコ人被験者の箱庭作品シリーズ示したように、作者の世界内存在の様態はまったく男性的一元性のイメージと不可分であった。つまり少数ではあっても、それらが強く男性的一元性の傾向を示していたのは事実である。

とはいえ、やはり現段階ではこれまでの実験の結果でもって、本報の考察で明らかにされたことがらが大陸文化に共通すると言いつけることはできない。前報までに検討した被験者を含めても、留学生男子被験者は33名、実験回数計76回に過ぎないのである。

そこで、次報以下では、こうしたこれまでの研究の成果を踏まえた上で、大陸的な空間様式の出現の背後にある共通の要因を行動生物学的視点から明らかにすることで、本報で考察した傾向が原理的に大陸の文化に共通するものであることを示す予定である。本報で論じたように、ノルベルグ・シュルツの空間論やエリアーデの世界像は、大陸文化における男性の無意識の考え方に偏った議論といえるので、大陸文化と日本文化の特徴の分岐が発生する要因を生物学的次元にまで遡って探り、それらを統一的に捉えうる地平を開き、文化的差異および男女差異を越えた人間一般に普遍的な空間論の立脚すべき基底を考察してゆきたい。

箱庭研究に関する既発表論文 本論文集（旧論文報告集）に発表のもの

- i) 坂戸省三：創作・表現行為および空間的表現の様態とその意味の箱庭療法を通じての考察、一 ライフ・サイクルと空間のイメージ構成に関する研究 第1報一、日本建築学会計画系論文報告集、第367号、pp.80-90、1986.9
- ii) 坂戸省三：男女それぞれにおける空間性の発達過程、一 ライフ・サイクルと空間のイメージ構成に関する研究 第2報一、日本建築学会計画系論文報告集、第377号、pp.97-105、1987.7
- iii) 坂戸省三：男女の空間的諸特性と世界像の形成、一 ライフ・サイクルと空間のイメージ構成に関する研究 第3報一、日本建築学会計画系論文報告集、第402号、pp.107-118、1989.8
- iv) 坂戸省三：人間における世界像形成の生物学的基盤について、一 ライフ・サイクルと空間のイメージ構成に関する研究 第4報一、日本建築学会計画系論文報告集、第421号、pp.111-120、1991.3
- v) 坂戸省三：人間における諸空間性の生物学的基盤について、一 ライフ・サイクルと空間のイメージ構成に関する研究 第5報一、日本建築学会計画系論文報告集、第435号、pp.127-136、1992.5
- vi) 坂戸省三：トルコ人と日本人の箱庭制作実験事例に現れた空間的特徴の比較考察、一 空間イメージの文化的差異に関する心理・社会的分析 その1一、日本建築学会計画系論文報告集、第520号、p.334、1999.6
- vii) 坂戸省三：箱庭制作実験事例に現れた空間構成における日本人的特徴と大陸的特徴の比較考察、一 空間イメージの文化的差異に関する心理・社会的分析 その2一、日本建築学会計画系論文報告集、第532号、pp.275-282、2000.6
- viii) 坂戸省三：空間構成におけるいわゆる日本人的特徴の心理的背景について、一 空間イメージの文化的差異に関する心理・社会的分析 その3一、日本建築学会計画系論文報告集、第552号、pp.335-342、2002.2
- ix) 坂戸省三：女性の箱庭作品において人類共通に見られる空間イメージとその特徴について、日本建築学会計画系論文報告集、第560号、pp.297-304、2002.10

注

- 1) 「世界内存在の様態」という言い方は包括的なものである。どのような世界のうちで生きているかということ、世界把握の基本的枠組み、自我の心理的構造や、意識の枠組み、アイデンティティの構造、空間感覚といったことがらは、その諸側面として捉えることができる。
- 2) 平成12年度に、私は文部省内地研究員として京都大学大学院工学研究

科生活空間学専攻岡崎研究室で研究に携わった。そのおりの実験。

- 3) なお前報では、「次報では、箱庭の枠を越えて、対象を建築論、空間論、建築史等に拡げて考察する予定である」と書いたが、今回の実験についての考察に変更する。
- 4) 多元的構成のうち特に、要素間の微妙なバランスの上に立つ非対称性や不規則性、水平に広がる性質等を持ち、空間自体が多元的といえるものをこう呼んだ。日本人建築系男子作品には、各空間が木々などで半ば囲われつつも連続していくものがしばしば現れ、それは日本人男子の意識や世界把握の枠組を反映していることを「その3」で論じた。
- 5) 岡田康伸京都大学大学院教授（臨床心理学、臨床教育学）が天理大学在職中におこなった箱庭制作実験の資料。私は岡田先生よりこの写真資料をそっくり貸していただいた。それを私独自の空間論的視点から分析したものが、論文iiおよび論文iiiの前半である。
- 6) 以下述べる特徴のうち、男子の移動・侵入的、外部的、女子の楽しげに暮らす様子、内部的、内包的という特徴は、エリクソンが参考文献1)のpp.117-128で既に述べているものである。なお外部的、内部的に関する定義は私自身の定義である。
- 7) 被験者募集は京都大学留学生センターでの授業の受講生に対しておこなった。被験者は、日本語・日本文化研修留学生、KUINP (Kyoto University International Education Program) 留学生、他大学留学のため同センターで日本語研修コースを受講している者、京都大学大学院生、京都大学研究生、京都大学学生、これら被験者の知人等である。なおこの実験の女子作品に関しては既発表論文ixで既に発表した。
- 8) 遠心的男性的一元性のイメージは隠れるところもなく開けた均質な空間の内、自律的な強さを秘めた個として存在するイメージである。日本人においては、心理療法の終結期や人生の転換期において自我の新たなあり方を獲得した表れとして、一時的に現れる程度である。
- 9) このイメージは一般に③の外部的、多元的構成として現れてくる。つまり分類①～⑥が空間構成的な分類項目であるのに対して、これは内容的な分類項目となる。
- 10) 参考文献2)、p.32
- 11) 留男10は初回に2作品を作ったので、2作とも掲示する。
- 12) 建築学専攻はこの被験者のみである。
- 13) 玩具としては十字架のついた墓であるが、作者は教会として使った。
- 14) 前報で高校生群、大学生群に遠心的形式的男性的一元性のイメージは一つもないと書いたが、この作品を遠心的男性的一元性のイメージに分類するとすれば1例あることになる。しかし写真でわかるように、右にキリンなどの野生動物が入り込んできており、左側に箱枠をこえてライオンのいるジャングルが作られている。このようないくつかの空間があるということのほうが主題に思える。また中央にある建物が全体を統合支配しているようには見えない。グラフ1、2を作った当時、この作品を野生動物のいる外部的、多元的な街空間と分類した。
- 15) 男性的一元性のイメージはインドのマングラのように宇宙全体を表す場合がある。それゆえ男性的一元性のイメージで内部的印象のものもあるが、それらは除いてある。
- 16) 女子の基本的空間イメージが一元的であるのに対して、男子のそれは多元的である。男性的一元性のイメージとは、もともと多元的なものを一つを中心に東へ西へ伸ばしたものである。それゆえ男子においては日本人、留学生を問わず多元的構成が多く出てくる。「その2」、「その3」で、均質空間における多焦点的な構成と、前述の「多元性の空間」とを区別したが、そうした区別は、空間的表現の専門科である意匠系の建築学専攻者によって作られた作品であつたからこそ可能であつた。今回の一般留学生の作品および岡田天理資料の作品では、そうした区別ははっきりせず、どちらも単に多元的と呼ぶ。
- 17) 参考文献3)、pp.55-61、119-121、155-157
- 18) 参考文献4)、p.14
- 19) 参考文献5)、pp.20-23
- 20) 前掲書、p.23
- 21) 参考文献6)、p.18
- 22) 論文iiiで示したように、日本人男子の場合思春期以降、男性的要素と女性的要素がある程度接近してくる。
- 23) インドネシアの留男16およびマレーシアの留男22はキリスト教徒。

参考文献

- 1) エリクソン、E. H.、仁科弥生訳：幼児期と社会 1、みすず書房、1977
- 2) 河合隼雄編：箱庭療法入門、誠信書房、1969
- 3) ボルノウ、O.F.、大塚恵一他訳：人間と空間、せりか書房、1983
- 4) エリアーデ、M.、風間敏夫訳：聖と俗一宗教的なものの本質について、法政大学出版局、1969
- 5) Norberg-Schulz, C.: The Concept of dwelling, RIZZOLI INTERNATIONAL PUBLICATION INC., 1985
- 6) 立川武蔵：マングラの宇宙観、季刊創造の世界、第84号、1992

(2002年10月9日原稿受理、2003年7月24日採用決定)